

# 刊行にあたって

君島 東彦

立命館大学国際平和ミュージアム館長、平和教育研究センター長

いまウクライナ、パレスチナにおける武力紛争を停戦させるための外交的努力がなされています。東アジアにおいても武力紛争を起こさせないための動きがあります。立命館大学国際平和ミュージアム、および平和教育研究センターの活動は、このような世界の人々の平和創造、平和構築への営みに少しでも貢献するものでありたいと思います。毎年3月に刊行している学術ジャーナル『立命館平和研究』もわたしたちのささやかな努力の一環です。

第26号は巻頭特集として、最近逝去されたふたりの平和研究者、ヨハン・ガルトゥング氏とベティ・リアドン氏の研究業績を総覧して、彼らの平和への意志を継承・発展させるための諸論稿を掲載しています。過去半世紀の間、ふたりの影響を受けなかった平和研究者はいないと思います。本号の特集がこれからの平和研究者、平和教育関係者に活用されることを願っています。

平和教育研究センターの研究プロジェクトは、2018年から、1970年の大阪万博に対抗して準備され、1969年8月に大阪城公園で開催された「反戦のための万国博（ハンパク）」に関する共同研究を行なってきました。本号には、『立命館平和研究』21号（2020年）、22号（2021年）、24号（2023年）、別冊第2号（2024年）に続いて、ハンパクをつくりあげた人々への聞き取り調査の結果が掲載されています。北摂ベ平連（「ベトナムに平和を！市民連合」）、南大阪ベ平連等、下から運動が立ち上がって1969年のハンパクに結実していく様子を活写しています。2025年大阪・関西万博が開催されようとしている現在、55年前の平和運動の記録は意味があると思います。いまウクライナ、パレスチナを見て、あらためて「殺すな」というベ平連のメッセージを再確認したいと思います。

他にも、戦没者への民衆側からの慰霊・追悼のあり方、小林秀雄の戦争論の読み直し等々、重要な論稿を寄稿していただきました。寄稿して下さったみなさまに御礼申し上げます。

本号が平和創造、平和構築へのひとつの力として活用されることを切望いたします。

